

はしがき

紅花が、近世三百年に亘り、我が出羽国最上地方の、文化と経済に与えた影響は、奥に大きいものがあります。

元祿の昔、俳聖芭蕉をして「行く未は誰が肌ふれん紅の花」の名句を残させた外、他の多くの文人からは、詩文の対象とされ、素朴な農民の囀には、誰が作ったともない民謡として、紅花摘唄が愛誦され、畫家に描かれては「最上紅花屏風」となりました。尾花沢の紅花商鈴木清風と、江戸の名妓高尾にまつわる情話も、この紅花が取り持った縁であつたとも言えるし、京舞妓の婉然たる友禪姿も、その大部分は最上紅花の賜であつたのです。

経済的には、一般農民の生活を豊かにしてくれましただけであつたに、「最上商人」として活躍した多くの商人たちの、経済力の基礎をなしたのも、この紅花でありましたし、市場の盛況をもたらしたのも、紅花に買う所が少なくなつたのです。山形の初市に無くしてはならない「花飴」等は、毎年のことながら、懐かしい情景であります。

羽州街道の栄えたのは、諸大名の参勤路であつたからではありませんが、国産としての紅花は、山形から大石田まで、必ずこの街道を駄送しなければならなかつたという制度に依ることも、決して見逃がすことの出来ない大切な問題でありました。

さらにまた、奥の細道をたどつた東北の片隅、この最上地方に、上方文化の遺産が案外によく残っているということも、これら紅花商人の上方往来によって移入されたためであ

つて、そうした面からの功勞も忘れてはならない点であります。

○ 最近、紅花の研究ということが非常に盛になつて参りました。特に、近世における社会経済史の立場から、學者の間に取り上げられておりますが、向題矣はまだ残つてゐるようであります。しかも、生産関係は全く農民の手にありましたために、そういう方面の記録は中々まとまつておりませんので、研究も思ふ様には進んで行きかねてゐる状況であります。

○ 私はこの「最上紅花史放談十話」も、僅かな資料を本にして書いておりますので一向にまとまつてはおりません。「放談」としたのも、全くそんなためであります。

○ 十の話は、一つ一つ独立してありまして、その間に何等の連絡もありません。ただ話の順序から致しますと、第一話は序説的なもの、第二話と第三話は総説的なもの、第四話と第五話はその品質に関するもの、第六話から第八話までの三つは商人や藩に及ぼした経済上の問題、第九話は本草学的な立場から見たもの、そして第十話はその衰微の事情を述べたものです。従つて全体の構成からは一貫性を持つてゐるとも言えませう。しかし飽くまで一話毎に独立させた関係上、話を進めて行く都合の上から、同じような内容が所々に出ており、大変しまりが無くなりまして、止むを得ないことでした。

○ 紅花はこの地方の特産ではありますが、当時の最上地方全体に関係してありますので、

語の内容も主地的には大部広がっております。郷土史となると、とにかく足元のことにはかり掘われがちで、広い眼で自分を見るところが忘れ去られます。そんな考えから第八語等も入れた訳ですが、広がり過ぎて、どの語にも中心点を失ってしまい、読んでみて、頭に何も残らないという変なものが出来上ってしまったようです。

○

記述の形態をお話体に見ましました。これは氣どつて訳でも何でもありません。資料篇というものは、その性質上や、もすると生の資料が多くなりがちで、それだけに読まれる方々も苦勞されるのではないかと考えられますので、こんな形をとってみたまでのことです。教葉の写真を挿入してみたり、各頁に挿を組んでみたりしたことも、全体の感じを軟かにし、そして楽しく全文を読み通して戴きたいという念頭からです。(悪文で決して楽しくは読めないでしょうけれど)なお、こういう気休な編輯を許して下さった委員会に御礼を申し上げます。

今 田 信 一

